

〈論文〉

# 視覚スキーマと格表示による 多義構造図の試案

— 移動動詞ハシルを事例として —

遠藤裕子

## 要旨

多義語の意味分析とその記述・表示の方法についてはさまざまなモデルが提案されてきている。本稿では、言語学的な裏付けを持ちつつ一般の日本語学習者にも理解可能な形を探った。具体的には、日本語の基本動詞の1つである多義語ハシルを取り上げ、用例を検討したうえで認知言語学の観点から8義に分析した。そして、意味拡張のプロセスと多義構造を、基本スキーマに基づく視覚的な図と格表示を組み合わせた形で示した。

キーワード：視覚スキーマ 多義構造図 格表示 動詞ハシル

## 1. はじめに

本稿では、日本語の基本動詞の1つである多義語ハシルを取り上げ、認知言語学の観点からその意味拡張のプロセスと多義構造を明らかにし、それを視覚スキーマに格表示を組み合わせた形で示すことを提案する。分析に当たっては用例を重視し、個別義間の連続性や周辺の用法などにも論及するものとする。

## 2. 多義性、多義構造および図式論

多義語<sup>(1)</sup>の分析に関しては、初山(2001:32)で、その課題として次の4点を挙げている。「(それぞれ確立した)複数の意味の認定」「プロトタイプの意味の認定」「複数の意味の相互関係の明示」「複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明」の4点である。

このうち、プロトタイプの意味の認定に関しては、イメージの具体性や認知的際立ちの高さ、用法上の制約の少なさ、複数の意味の起点となる位置にあることなどが、その基準として一般に挙げられている。松本(2009)は、多義語の中心的意味<sup>(2)</sup>には2種類あるとしている。1つは概念的の中心性で、「心的辞書の多義語の構造において、他の個別の意味の派生の基盤となるような、概念的に最も基本的な意味」であり、もう1つは機能的の中心性で、「言語話者の伝達活動の観点」から見た「一番よくアクセスする意味」である。そして、この両方を備えた意味が「典型的な中心的意味」であると主張している。また、木下(2018)では、多義動詞の「意味拡張の起点」と「直観的プロトタイプ」という二種の中心義についてずれが生じる場合があるとし、例として動詞「とく」を取り上げ分析している。

「意味の相互関係」に関してLangacker(1990)などで提案されている意味拡張のネットワークでは、プロトタイプと拡張事例から抽出された共通点として「スキーマ」が設定されている。スキーマは、より一般的には、あるカテゴリーの全成員に共通する抽象の意味とされるものである。そして、このような考え方に基づく意味分析において、プロトタイプを含

---

(1) 国広(1982:97)によると、多義語とは「同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語」である。

(2) 松本(2009)は、プロトタイプカテゴリーの理論に基づく「プロトタイプの意味」よりも一般的な用語として「中心的意味」を使用している。

む個別義やスキーマを視覚的に表示することがなされてきている<sup>(3)</sup>。

本稿では、認知言語学の枠組みで、動詞ハシルの個別義とプロトタイプおよびスキーマを分析・設定し、視覚的スキーマと意味に直接関連する格助詞を組み合わせて個別義を示し、さらに個別義間の関連をネットワークで示すこととする。以上3点と典型的な用例を示すことで、ハシルの全体像と個々の意味用法を日本語学習者が理解するのに役立てられることを期待するものである。

### 3. 動詞ハシルの先行研究と研究課題

基本動詞の意味や用法に関する分析は数多く、また、日本語学習という観点から、用例を数多く挙げたりイメージ図を示して意味を伝えようとしたりする試み<sup>(4)</sup>も見られる。動詞ハシルについても例外ではない。

本節では、検討した先行研究の中から何点か特徴的な研究を取り上げてハシルの全体像を示し、本稿の意味分類の立場と分析の課題について述べる。

#### 3.1 ハシルの意味用法 — 先行研究

ハシルの意味分析にあたり、できるだけ幅広く意味用法を収集する目的で10点の国語辞典<sup>(5)</sup>の記述を調査した。このうち、ハシルの意味分類<sup>(6)</sup>

- 
- (3) 'over' に関するいくつかの研究 (Dewell (1994) 他) で図が示されており、非英語母語話者にとっては示唆に富む。
- (4) 例えば、国立国語研究所のサイト「基本動詞ハンドブック」には、冒頭に「～のコアイメージ」としてイラストが大きく掲載されている。http://verb-handbook.ninjal.ac.jp/
- (5) 定評のある大型の『日本国語大辞典』から、携帯型で「中学生向け」の『例解新国語辞典』まで10点。書名は、稿末の「国語辞典」を参照されたい。
- (6) 意味分類数は、4分類が2点、6分類が1点、10分類が1点、12分類が3点、

が他辞書と比較して細かく、かつ意味間の関連性に注目して語義を記述・配列していると考えられる『明鏡国語辞典第二版』（以下、『明鏡』と略）の記述を引用する。下線は筆者の判断で、意味の関連性を際立たせるために付したものである。

- ① 人や動物が足を交互にすばやく動かして移動する。かける。「ランナーが全速力で走る。チーターが草原を走る。廊下を走ってはいけない。」
- ② 乗り物などが進む。また、運行する。「電車が郊外を走る。このバスは12時を過ぎても走っている。」
- ③ 目的の場所へ急いで行く。急行する。急ぐ。「取るものもとりあえず事故現場へ走る。」
- ④ 目的達成のために急いで行動する。特に、安易な手段での解決を急ぐ。「ドル買いに走る。売上げ減となるとすぐさま値上げに走る。」
- ⑤ ある目的のために忙しく動き回る。東奔西走する。駆けずり回る。飛び回る。「金策に走る。」
- ⑥ (急いで) 逃げ回る。また、逃げてある側につく。「味方を裏切って敵方に走る。」
- ⑦ 水などが勢いよく流れる。また、水などが飛び散る。ほとばしる。「岩間を清水(せいすい)が走る。傷口から血が走る。」
- ⑧ すべり出る。「刀が鞘(さや)から走る。」
- ⑨ 投げた球がスピードに乗る。「今日はボールがよく走っている。」
- ⑩ 文字・文章などが思いどおりに書ける。「すらすらとペンを走る。」
- ⑪ ある方向や状況に強くかたむく。「悪の道／流行／極端／私利私欲に走る。」

- ⑫ ある方向に通じている。また，細長く延びる。「南北に国道が走る。道路に亀裂が走る。」
- ⑬ 光・音などが瞬間的に現れて消える。「夜空に稲妻が走る。」
- ⑭ ある感覚・感情などが瞬間的に現れて消える。「肩に痛みが走る。声を聞いただけで虫酸（むしず）が走る。」

次に，文型や文法情報，慣用句など広く関連情報を記載した『日本語基本動詞用法辞典』（以下，『動詞用法』と略）から，「意味・文型」の部分を簡略化して引用する（420-421）。この辞典は補語基となる名詞の意味カテゴリーも分析・記述されている。

- ① 足で速い足度で進む。
  - a [人・生き物・乗り物] が（[所] を）（[所] から）（[所] に / へ / まで）走る
  - b [人・生き物・乗り物] が [順番] を走る
- ② ある目的を果たすために急いで行く。
  - [人] が [活動] に走る
- ③ ある一つの傾向に向かって進む。
  - [人・組織] が [事・感情・人] に走る
- ④ ある感情・考え・痛みなどが瞬間的に現れて消える。
  - [痛み・考え・心理] が [身体部分・心] を走る
- ⑤ ある物が線状に伸びる。
  - [道・山脈・溝・稲妻] が（[所] を）（[所] から）（[所] に）走る

上記の「意味・文型」記載とは別に，「慣用句」として「敵方へ走る，筆が走る，むしずが走る」の3つを挙げている。

国語辞典と用法辞典の上記2種の記述でハシルの全体像はほぼ示されて

いると考えられるが、辞書によって分類や記述には異同が多いので、以下、少数の辞書に見られる意味用法の記述をいくつか挙げる。

「〔相場用語〕先取りして株などを売り買ひする」〔音楽〕テンポが始まったときより速くなる」（『日本国語大辞典第二版』（以下、『日国』と略)), 「実行される。例：多くのプロジェクトが走っている」「動く。例：会社のパソコンと同じソフトが走る」（『三省堂国語辞典第七版』（以下、『三国』と略））などである。

日本語を共時的・通時的に記述する<sup>(7)</sup>『日国』には、13世紀以前の用例しか掲げられていない意味が14分類中2つある。「(3)水などが勢いよく流れる」と「(4)激しく動く。特に「胸がはしる」の形で〈略〉」である。このほか、「(8)多くのものが散り広がる。飛び散る。ほとばしる。ころがる」という意味が立てられ、「血、珠、塩、炭」などを動作主体とする文例が挙げられている。「血」以外の例は他の辞書にはほとんど見られない。

### 3.2 ハシルの特徴および多義性

次に、動詞ハシルを意味論の立場から論じた研究を見る。

松本(1997)は、「移動動詞における語彙化パターン」の章で「様態を表す移動動詞」として次の13語を挙げている(p. 143)。

歩く、走る、駆ける、這う、滑る、転がる、跳ねる、舞う、泳ぐ、飛ぶ、潜る、流れる、急ぐ

「行く、越える、去る」などが「方向性」や「経路位置関係」を包入するのに対し、「走る」は「様態」を包入する動詞としている。つまり、「走る」は、移動の様態を含んではいるが、起点・着点・通過点のいずれかを指定するものではないということである。

---

(7) 『広辞苑』も、古語を現代語との区別なく記載している。用例が『日国』より少ないため、読者にはその区別がやや分かりにくい。

なお、ここで論じられている「走る」は、3.1で挙げた『明鏡』の①義に関するものであり、本稿でも、プロトタイプは①であるとする。

また、吉村（2004：96-102）では、多義性について説明する中で動詞「走る」を例として取り上げ、次のように述べている。

「走る」の「スキーマ的意味」は「連続して速く動くさま」、プロトタイプの意味は「人間が足を連続して速く動かし移動するさま」であり、複数の周縁的意味は「プロトタイプの意味属性の一部（「連続して速く動くさま」）が共有された形で属性の連鎖が生じ、「全体が家族的類似性を構成」している。その上で、意味拡張の全体を意味ネットワーク図として模式的に描いている。

この他、英語の run と対照した意味分析<sup>(8)</sup>も見られるが、川出（1987）の run の分析で、コア<sup>(9)</sup>記述に加え「そのもののエネルギーがなくなり自然に停止するか、無理に止めようと外から力を加えない限り、（スルスルと）そのまま動き続ける感がある」（p.143）とされているのが、日本語のハシルと異なる点と思われ、興味深い。

### 3.3 ハシルの意味記述と表示の課題

ここまでの意味分析記述を検討して浮かび上がる細かい問題点としては、分類の異同の他に以下のような事柄が挙げられると思われる。

- ① 「細長く線状に延びる」にはさまざまな用例が見られる。この用法に何か制限や特徴はないか。
- ② 『明鏡』『旺文社国語辞典第11版』（以下、『旺文社』と略）に「光

(8) 山本（1984）など。

(9) 「コア」core とは、田中・川出（1989）では、「文脈に依存しない意味」であり、「無制限な語義の広がりを抑える方向で作用する」もので、「語義のすべてを視野に入れたものでなければならない」とある。

や音がハシル」という記述があるが、「音」だけ（光を伴わない音）がハシル様子を表す用例が見つからず意味用法が不明である。これで適切か。また、「光」の意味用法に何か制限や特徴はないか。

- ③ 「感覚・感情・考えが急に現れて消える」の「感覚など」に、何か制限や特徴はないか。
- ④ 現代語としては用例もあまりなく、共起する名詞の自由度が低いと考えられる意味（『日国』の(3)(4)や(8)など）が、記述量の違いはあるものの複数の辞書で言及されている。これをどう扱うのが妥当か。

上記①②③は、本稿の課題の一部として当然扱われる内容になるであろう。また④については、現代語を対象とした携帯型の辞書に記載されているものについては、用例を調査するなどして判断することになると思われる。

以上のような問題意識の上に立って、本稿では多義動詞ハシルの個別義を記述すると同時に、意味拡張のプロセスを示し、かつ視覚スキーマに場所格表示を組み合わせた表示法を提案する。

## 4. ハシルの意味拡張とスキーマ

### 4.1 ハシルの8義

本研究では、コーパス等の用例を広く検討し、認知言語学の立場から意味拡張を分析してハシルの意味を8分類することとした。意味拡張とスキーマについて詳述する前に、8義の「動作主体（ガ格を伴う名詞）の意味カテゴリー」「動作・作用の性質」「動作・作用の領域」の特徴を表1にまとめて示す。この3点に注目するのは、これらを表にまとめて記述することにより、意味間の関係を概観することができるからである。個別義内の下位分類（第1義と第6義）、慣用句、概念メタファーによる一時的メタファー表現などについても、4.2以降で触れることとする。なお、表と



表 1 ハシルの 8 義の基本的特徴

	動作・作用の 主体の意味範疇	動作・作用の 性質	動作・作用の 生じる領域	意味拡張, 下位分類など	
1	人間・動物, 乗り物	移動	物理的空間	プロト タイプ	1 a 人間など 1 b 乗り物
2	人間	移動	物理的空間	1 → 2	目的地の焦点化, 移動の様態の背 景化
3	人間・組織	行動	社会的空間	2 → 3	性急さ, メタファー
4	具象物	移動	物理的空間	1 → 4	被使役物の焦点 化, メタファー
5	具象物	—	(物理的空間)	1 → 5	主観的移動 (心 的走査)
6	抽象的具象物 〔現象〕	主観的移動/ 出現と消滅	物理的空間	5 → 6	6 a 線状の光 6 b 拡がる光
7	抽象物〔感覚〕	移動・出現と 消滅	心理的空間 〔身体〕	1・6 → 7	メタファー
8	抽象物〔感情〕	移動・出現と 消滅	社会的空間	1・6 → 8	メタファー

合わせて、実例を参考にした作例を付す。

以下, (1)~(8) は, 表 1 の意味番号の 1~8 に対応する。

- (1) 私は毎朝 5 キロ走ります。／車がたくさん走っている。
- (2) 不安になった被害者は ATM へと走った。
- (3) 居場所のないその少年は非行に走った。
- (4) ことばがどンドン湧いてきてペンが走った。
- (5) 何か所か, 壁に亀裂が走っている。
- (6) サーチライトの光が夜空を走った。／突然閃光が走り, あたり一

面が明るくなった。

(7) ふくらはぎに鋭い痛みが走った。

(8) 女性の顔に戸惑いの色が走った。／社内に動揺が走った。

なお、本稿では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJと略)を主な用例資料とし、出典を例文の後ろにかっこ書きした。出典の記載がないものは、筆者による作例である。検索には、NINJAL-LWP for BCCWJ<sup>(10)</sup>(以下、NLBと略)も使用した。

意味拡張のプロセス等に関して本稿で使用する概念として、メタファー、メトニミーなどがある。メタファーは、端的に言えば、起点領域から目標領域への写像であり、異なる領域にある2つの概念の類似性に基づく比喩である。またメトニミーは、単一領域内の要素のずれであり、同一領域にある2つの概念の隣接的関連性に基づく比喩である。焦点移動・焦点化は、メトニミーに含まれるものとする。また、言語主体が対象物の動きに目を向けて追うときのプロセスを本稿では走査 scanning と考え、心的走査 mental scanning は、線状のものを想定して心の中の目で追うプロセスを指すこととする。

## 4.2 個別義間の関連性

### 4.2.1 第1義およびプロトタイプ

まず、ハシルの第1義とプロトタイプおよびスキーマについて述べる。

〔第1義〕 〈人などが〉〈陸上などを〉〈足を交互に動かして〉〈一定方向に〉〈素早く〉〈進む〉

1a 〈人や動物が〉〈陸上などを〉〈足を交互に動かして〉〈一定方向に〉

---

(10) BCCWJを対象としたコーパス検索ツール。名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示できる。

〈素早く〉〈進む〉

1b 〈人の操作する乗り物が〉〈陸上などを〉〈一定方向に〉〈素早く〉〈進む〉

第1義は、abとも、「動作主体ガ（所カラ所マデ／ニ）所ヲ～」という格関係を基本構造として持ち、起点と着点は焦点化によって現れる場合があると考えられる。移動経路のヲ格は事象成立には必須であるが、実際には（1）（9）のように「走る」だけでも文となる。（10）（11）のように、いずれかの格（二重下線部）だけが使用される文も数多く見られる。

（9） 他にも、沿線には列車が走る姿をカメラに収める方もたくさんいらっしゃいました。  
（Yahoo! ブログ）

（10） プリストル海峡沿いの道路を、夜遅く警官が自転車で走っていました。  
（秦寛博『悪戯好きの妖精たち』）

（11） 愛車のポルシェで東京まで走っていきよった。  
（板東英二『プロ野球知らなきゃ損する』）

（10）では「自転車が走る」ではなく「警官が自転車<sup>・</sup>で走る」となっており、人間と自転車が隣接（一体化）している場合、そのどちらに焦点を当てるかで言い分けられることがわかる。「車でハシル」は（12）のように文脈によっては許容されるが、新幹線などを運転士が仕事として走らせている場合には、手段のテ格の使用は不自然なようである。

（12）？その運転士は、のぞみ13号で新大阪へ走っていた。

（10）（11）などの例からもわかるように、1aと1bには連続性があり、人から乗り物へメタファーで拡張したというよりも、人の操作する乗り物に身体が拡大し、メトミーで意味拡張したと考える方が妥当であろう。

次に、1aの「陸上などを」については、移動経路が「面」的性質を備え

ていれば、陸上ではなく水上・水面でもハシルと言うことができる。次の(13)のように足を動かして水面を走る例も稀に見られる。第1義には、接面性が要素として含まれると考えられる。ただし、典型的には陸上である。

(13) 水の上を走るトカゲ バシリスクの動画

(<http://www.tomorrowearth.com/2008/12/jesus-lizard.html> 20180830)

1bの「乗り物」としては、「車、電車、列車、自動車、車両、汽車<sup>(11)</sup>」など陸上の乗り物が多いが、(14)のように水上を行く船の例も少なくない。

(14) 定置網の漁船が魚市場に向かって走っています。(Yahoo! ブログ)

また、(15)のような「[[順番]を走る]」(『動詞用法』p.420)については、(16)のような「～の前／後ろ／横－をハシル」という位置関係兼場所を表す表現を介して「トップ／先頭<sup>(12)</sup>－をハシル」のような形が定着した可能性が考えられる。ヲ格は1文に重複して使用することはできないため、複数の移動物の位置関係を示す語句がヲ格で示されると、移動経路が現れることはなくなる。

(15) ホンダのRA272はスタートから終始トップを走り続けて、ついに悲願の初勝利を飾る。 (日本工業新聞社編『決断力』)

(16) 明らかに自分より若い子達が400ccとか乗ってるのに、その横や後ろをチマチマ走るのは正直…苦痛でした。 (Yahoo! ブログ)

以上、第1義の意味と用法について述べた。

---

(11) NLBの「…が走る」パターンの頻度順に挙げた。

(12) 「先頭を走る」の用例は、BCCWJではメタファー表現としての使用が非常に多い。

第1義はハシルのプロトタイプであると考えられる。「動き」が具体的に観察可能であり、慣習化の程度が大変高く、デフォルトの状態で想起しやすいなどの条件が揃っていると言えるだろう。aが原義であり、人力車や籠、自転車、バイクのように、操作する乗り物へと人間の身体が拡大して使用され、さらに自動車、電車のように人間の姿が見えない乗り物の移動へと、同じ領域内のメトニミーで拡張していると考えられる。生き物も乗り物も、外部の力で動かされるのではなく、自らの力で移動する点は共通している。

#### 4.2.2 第2義～第4義の意味用法と意味拡張

第2義から第4義は、以下のように記述することができる。

[第2義] 〈人が〉〈ある目的のために〉〈ある所へと〉〈急いで〉〈移動する〉

人間がハシル（第1義）のは、歩く場合よりも急いで移動したい場合が多く、そこから目的地へ焦点が移動し慣用化したと考えられるのが第2義である。目的地における目的がさらに前景化し、「足を動かす」「接面性」といった具体的な移動の様態を表す要素は背景化する。物理的に空間移動はするが、それよりも目的の方が際立つ用法である。

方向性を示す「へ」や移動先を示す「ニ」とは結びつくが、第1義には現れる到達点（限度）を示す「マデ」とは結び付きにくい。(2)のほかに、(17)のような例が挙げられる。

(17) それで、京都にいる慶喜のもとへ、急使が走った。

(水野泰治『徳川慶喜』)

『明鏡』の意味⑤など複数の先行研究で、「金策にハシル」<sup>(13)</sup>との用例とともに「動き回る」などの説明がされている意味用法は、この第2義に含めることができる。「金策にハシル」場合も、意味的には「所へ／ニ」が必須であるが、前述したように目的地よりも目的地における目的に焦点が移っているため「目的ニ」の方が明示されている。「金策」の例の場合は、この語自体があれこれ工夫する意を含む<sup>(14)</sup>ためハシリ回ると解されるが、(18)では行く先が1カ所でも複数カ所でもかまわないと思われる。

- (18) 筮竹占いの本をつくったときは焼鳥の串を調達に走り、かるたや  
双六のサイコロ、ジグソー・パズル、はては花の種まで手配したり  
で、〈略〉 (『おかしな本の奮戦記』堀内俊宏)

また、『明鏡』の意味⑥など、複数の先行研究で「逃げだす、逃げ回る、敵方につく」などの説明がされている意味用法は、『三省堂国語辞典第七版』(以下、『三国』と略)では「文章語」と記されているように、現代語ではあまり使用されない用法である。意味記述も用例も先行研究において一貫性が見出しにくく、個々の古典の実例に合う現代語を当てた印象が強い。そこで、本稿では1つの意味としては取り上げないこととした。

ただ、こういった用例の意味拡張については、説明が可能である。第2義では、移動先に目的があるのに対し、このやや古い用法の一部(逃げる)は、移動元(起点)からいなくなることが目的となった用法と考えられる。移動する主体ではなく、主体の存在しない起点に焦点が移動していると考えられる。次のような例が挙げられる。

---

(13) 実際の用例を見ると「金策に－走る／走り回る」の両方が見られる。複合動詞「走り回る」の前項のハシルは、第2義に該当すると考えられる。

(14) 「さまざまに工夫して入用なかねをととのえること。－に駆けずり回る」(『広辞苑』)などの記述がある。

(19) 女郎をつれはしったがよい

（『日国』(5)歌舞伎（1702年）からの例）

〔第3義〕 〈人などが〉〈ある行為・行動へと〉〈性急に〉〈向かう〉

表1に記したように、第3義は、動作・作用の性質が「移動」ではなく「行動」であり、また動作・作用の領域が単なる物理的空間ではなく人間から成る社会的空間となっている。異なる領域へのメタファーによる意味拡張である。

(20) 広告コピーの目的は正確な情報伝達ではなく、読んだ人間に商品を買わせる、ある行動に走らせるということなのだから。

（鐸木能光『インターネット時代の文章術』）

(21) ですが、先生が最も嫌われたのは、華美に走ることでした。

（宇野千代『きもの日和』）

(22) たとえば歯周病の治療が見過ごされたまま、その歯の隣にインプラント手術が行われたり、営利主義に走って、患者さんとのコミュニケーションをおろそかにしたり…。

（玉木仁『安心のインプラント治療』）

NLBによると、「非行、行動、行為、主義、極端、趣味、不倫、保身、感情」などの名詞の使用頻度が高くなっている。全体的にマイナス・イメージの語句がやや多く、対となるプラス・イメージの語句が想起されやすいものが多い。(20)では、冷静で合理的な行動の反対の行動であり、(21)では、「流行や値段の多寡にとらわれない“きもの選び”」という基本姿勢の反対という捉え方、(22)では、患者本位の治療の反対のハシルと理解される。

第3義は、目的となる行為・行動へと急いで向かう時には、熟慮して判

断する余裕がないため、安易で好ましくない行動になりやすいという推論に基づくものと考えられる。「行動、テクニック」といったプラス・イメージもマイナス・イメージも伴わない語と使用されると、それが話し手の行為であれ第三者の行為であれ、安易に飛びつく性急さへの負の評価の表現となる。

〔第4義〕 〈ものが〉〈素早くなめらかに〉〈動く〉

第4義は、用例がやや限られているが、後述するメタファー表現とは異なるものとして多義構造上に位置づけたい。具体例としては、「筆が走る、ボールが走る」などが挙げられる。ここでは、使役者が筆やボールを素早く移動するよう働きかけ、その結果被使役物が素早くなめらかに動くときに、その被使役物の方に焦点を当てた言い方であると考えられる。(24)では人がボールをハシルせ、ボールがハシルことを表している。慣用化した表現で、ボールは、使役者の意図通りあるいはそれ以上のなめらかな素早さで動くことを表している。

(23) 筆が面白いくらいに走った。四百字詰百三十枚ほどの小著だが、  
半月あまりで書き上げてしまった。 (高田宏『われ山に帰る』)

(24) 最後の方は ボールが走り始めましたが、やはりコントロールが  
悪いとボールの勢いは意味がない。 (Yahoo! ブログ)

移動する「物」がガ格に来る使い方には、さらに、一時的なメタファー表現と解される用例も見られるが、本稿では、こういった用例は、語の意味として慣用度あまり高くないと考え、個別義としては立てなかった。次の(25)は、動作・作用の主体において、モノを人に見立てた第1義か



らのメタファー表現と考えられる。<sup>(15)</sup>

- (25) 部屋の片すみに ほうずえついで ため息一つ 雲が走ってる  
黄昏の街 (Yahoo! ブログ)

また、複数の辞書で記載のある「刀が走る（鞘から抜ける意）」は、スキーマと直接つながるものであると考えられる。BCCWJでは1件用例が見られたが、しかし、「鞘から抜ける」意ではなく、むしろ(24)の「ボール」の用例に近い意味と解釈されるものであり、意味分類において別に扱う必要はないと考える。

#### 4.2.3 第5義～第8義

続けて、第5義から第8義について述べて行く。

〔第5義〕 〈移動経路などが〉〈線状に〉〈のびる〉

第5義に分類される用例としては次のようなものが挙げられる。

- (26) 叡森の東を小岩井有料道路が南北に走っている。  
(松田司郎『宮沢賢治の旅』)
- (27) 網膜の血管がその上を走っていることで、それがわかります。  
(本田孔士『あなたの眼は大丈夫?』)
- (28) 地面のほとんどすべてに、無数のひび割れが走っていた。  
(丸山直樹『アフガン乾いた大地戦火の中の民』)

---

(15) 次のような例は、「目標に向かって行動を続けることは、目的地に至る道を進むことである」という、第1義からの概念メタファーに基づくメタファー表現であると考えられる。ここでは、動作・作用が、物理的空間から時間的・社会的空間へ写像されている。「今日はホントにありがとうございます。今日が15年ですがこれからも DEEN は走り続けていきます」(Yahoo! ブログ)

- (29) 自治区のほぼ中央を天山山脈が走っていて、それより北を「北疆」、南を「南疆」と呼ぶのがふつうです。 (陳舜臣『中国歴史の旅』)
- (30) 袖に別珍のラインが走る コーデュロイジャケット。 (Boon)

ガ格名詞として使用されているのは、「道路、道、国道、街道、鉄道」「血管、静脈、パイプ、神経」「亀裂、ひび割れ、断層」「山脈」などさまざまである。

このうち、「亀裂」に関しては、次の(31)のように眼前で亀裂が生じるようすを描写する用例もあれば、「走っている」の形で線状に伸びる状態を言う用例も見られる。(31)は、亀裂が線状に生じる過程を視覚で捉えた表現と考えられる。NLBの「亀裂」の31例の形を見ると、多い方から順に「走った>走っている>走り、>走りはじめた>(その他)」となっている。

- (31) バリバリバリ…！空間に亀裂が走った。「結界が…！」  
(早坂律子『超魔炎獄変』)

次に、「道路」や「血管」などは、乗り物などや血液が(素早く)移動する場所であり、名詞において、容器と中身のメトニミーでより際立ちの高い容器の方へ拡張したと考えることができる。パイプと液体、神経と電気信号なども、同じ関係である。いずれも「走っている」の形で線状にのびる状態を心的に捉えている。

さらに、(29)(30)のように、ガ格名詞自体には何の移動の痕跡がない例も見られる。「山脈」の用例4例では、「走っている、走る+名詞」が各2例となっている。ここでは話し手の主観的移動によってハシルが使用されていると考えられる。

第5義は、詳細に分析するとこのように違いが見られるが、共通するの

はガ格名詞であるモノの方が移動するのではなく、話し手（言語主体）の視線あるいは心的視線が線状に移動する点であり、また、多くは心的走査によるものである。

〔第6義〕 〈光が〉〈線状に（または周囲に）〉〈瞬間的に〉〈現れる〉

第6義に分類される例としては、次のようなものがある。

(32) 遠くで白いいなずまが走った。 （速水彩『青いプリンク』）

(33) 〈略〉キュベレイとコア・ファイターの間にビームが走った。

（遠藤明吾『機動戦士ガンダム ZZ』）

(34) 突然閃光が走り、空間が明るくなった。

（石垣用喜『石垣島失踪事件』）

ガ格名詞としては、「稲妻、稲光、光、閃光」などが見られる。国語辞典等においては、速い移動に注目して分類するもの（『大辞林第三版』『岩波国語辞典第七版新版』『例解新国語辞典第九版』『新明解国語辞典第七版』）、瞬間性に注目して分類するもの（『明鏡』『旺文社』）、線状性に注目して分類するもの（『動詞用法』）などが見られるが、本稿では、典型的には線状性と瞬間性を有すると考える。(32) がその例である。しかし、(6) のサーチライトのように「+線状性、-瞬間性」の例もあれば、(34) の閃光（＝瞬間的に強くひらめく光<sup>(16)</sup>）のような場合は、「±線状性、+瞬間性」であると考えられ、他の語義同様、共起する名詞によって範囲は広がる。

第5義の「移動経路などが線状にのびる」と大きく異なる点は、道などが実際には静止しているのに対し、光は移動することである。速く移動す

(16) 『明鏡』の記述。

るものは、一般に眼前では瞬間的に出現し消滅するように見えることから、素早い移動と瞬間性は、推論的につながると考えられる。

なお、『明鏡』には「光・音などが瞬間的に現れて消える」と記されているが、雷のように光と音が同時に現れる例は数多く見られる一方、音だけがハシル用例は、BCCWJで見える限り用例が見当たらなかった。音は視覚的な線状性は持たず、仮に時間的な線状性を持つならば瞬間的にはならないので、「音」は排除していいと考えられる。

〔第7義〕 〈強い感覚が〉〈身体の一定の範囲で線状に〉〈瞬間的に〉〈拡がる〉

第7義に分類される例には、(7)のほか次のようなものがある。

(35) その途端に、フィリップは背筋に悪寒が走るのを覚えた。

(森詠『戦場特派員』)

(36) 背筋に冷たいものが走った。恐怖に毛穴がぶあーっと開く。

(佐々原史緒『かくて背信の旅はおわる』)

(37) 今、起きたら全身に痺れが走り動くことも、ままなりません。

(Yahoo! 知恵袋)

第7義は第8義と意味的に近い関係にあるが、第7義は感覚主体が自身の内部に強い刺激が出現するのを知覚する場合を表し、第8義は個人あるいは集団に感覚・感情が出現するのを外部から捉えて表している。

ガ格名詞としては、「痛み、激痛」などのようにほぼ第7義と解される語群もあれば、「緊張」のように、(38)では第7義、(39)では第8義となるような語群とがある。

(38) ハッと胸に緊張が走った。 (夏樹静子『黒白の旅路』)

(39) エンジニアたちの間に緊張が走る。 (高嶋哲夫『スピカ』)

第1義から第6義までと第8義は、観察主体が、人間や具象物の動きや在りようを視覚を中心とする感覚等から判断する表現であるのに対し、第7義は身体感覚であり、刺激を感じる心理的（あるいは精神的）空間という異なる領域についての用法である点が他の個別義と異なる。

〔第8義〕 〈強い感情が〉〈個人や、社会の一定の範囲に〉〈瞬間的に〉〈拡がる〉

第8義の用例としては、前述の(8)(39)や次の(40)(41)などが挙げられる。感情などが個人の表情などに瞬間的に現れる用法と、感情などが一定の範囲の人たちに瞬時に拡がる用法とに分けることもできる。どちらも、個人の内面に生じた強い感情が外から観察できる変化として現れた様子を述べるものである。

(40) 唯野の落ちつかぬ様子を見て日根野の表情に喜悅の色が走った。  
 (筒井康隆『文学部唯野教授』)

(41) 全国の障害者に危機感が走った。  
 (中西正司、上野千鶴子『当事者主権』)

以上、第1義から第8義までの意味を記述し、語義間の関連性について述べた。

#### 4.3 視覚スキーマと格表示による多義構造図

本節では、動詞ハシルの視覚スキーマに、4.2で論述した場所に関わる格助詞を組合わせて、8義に対応する8つのイメージ図を作成し、それらを多義構造図（ネットワーク）として示す。

ハシルのスキーマは、図1のように示すことができる。図1～図9において、「太い矢印」は動作・作用の主体の動きを示し、矢印の塗りつぶさ

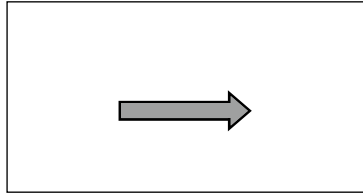


図1 ハシルのスキーマ

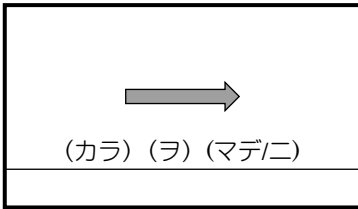


図2 第1義 (例：毎朝5キロ走る)

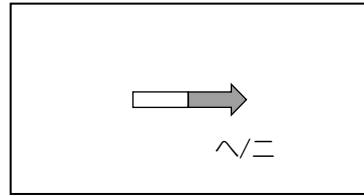


図3 第2義 (例：ATMへと走る)

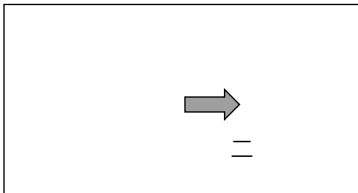


図4 第3義 (例：非行に走る)

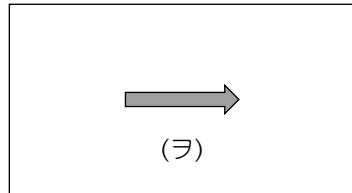


図5 第4義 (例：ペンが走る)

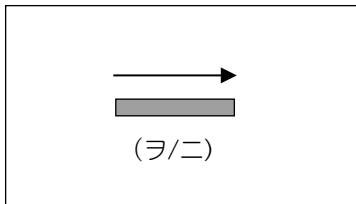


図6 第5義 (例：亀裂が走る)

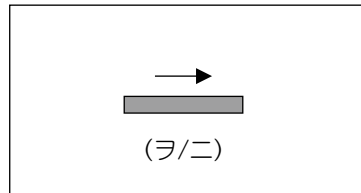


図7 第6義 (例：稲妻が走る)

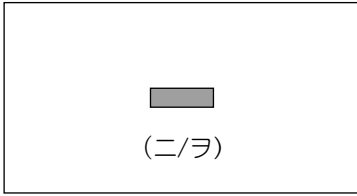


図8 第7義（例：痛みが走る）

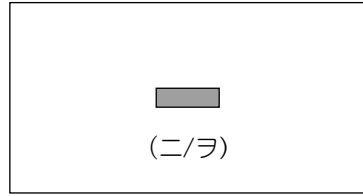


図9 第8義（例：動揺が走る）

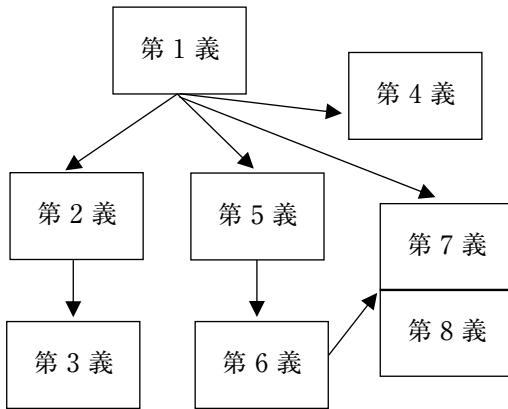


図10 ハシルの多義構造

れていない部分は背景化していることを表す。また、「太い線」は動きが見られないことを表し、太い線の上の「細い矢印」(→)は、言語主体（話し手）の主観的移動を表す。抽象的空間における動作・作用である第7義と第8義は、視覚的に表すのは困難であるが、仮の案とし提示した。第1義から第8義まで、短い例を添えて図に示した。

上記の8つの図（つまり8義）は、4.1, 4.2で論じたように、図10のような多義構造をなすと考えられる。図10に上記の8図を入れた構造図が本稿の結論である。

## 5. おわりに

本稿では、移動動詞ハシルを事例として、個別義、プロトタイプ、スキーマを認定し、視覚スキーマに場所格表示を組み合わせる方法で多義構造図を示した。個別義の分析と意味拡張に関しては、用例を検討した結果、中間的な使用が見られて意味拡張のプロセスが鮮明になったと思われる。また、慣用化していないメタファー表現にも言及した。

視覚的スキーマは一般的に簡潔なものになりがちであり、そのため、必ずしも語の理解につながりにくい場合もあるように思われる。そこで、本稿では、視覚スキーマに格表示を加え、さらに補助的な記号を加えることで、より伝わりやすい多義構造図のモデルを提案した。

### 参考文献

- 川出才紀 1987 「項目：run」 田中茂範編著『基本動詞の意味論』142-145 三友社出版
- 版
- 木下りか 2018 「多義動詞の意味拡張の起点と直観的プロトタイプ」 日本認知言語学会第19回全国大会ワークショップ「多義動詞の分析——特徴の記述と分析方法の精緻化」配付資料2-5
- 国広哲弥 1982 『意味論の方法』大修館書店
- 小泉保他編 1989 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 田中茂範・川出才紀 1989 「基本動詞の意味分析：コア・パラメータ・視点」『茨城大学教養部紀要』(21) 385-418
- 田中茂範 1990 『認知意味論——英語動詞の多義の構造』三友社出版
- 松本曜 1997 「空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』125-230 研究社出版
- 松本曜 2004 「日本語の視覚表現における虚構移動」『日本語文法』4 (1) : 111-128
- 松本曜 2009 「多義語における中心的意味とその典型性：概念的の中心性と機能的の中心性」*Sophia Linguistica: working papers in Linguistics* 89-99
- 栩山洋介 1993 「多義語分析の方法——多義的別義の認定をめぐる——」『名古屋大学日本語・日本文化論集』1 : 35-57 名古屋大学留学生センター



- 梶山洋介 2001 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明 他編『認知言語学論考 No. 1』29-58 ひつじ書房
- 山梨正明 2000 『認知言語学原理』くろしお出版
- 山梨正明 2004 『ことばの認知空間』開拓社
- 山本和之 1984 「Run と「走る」—— 辞書の定義と日英語の比較 (1) ——」『英語と英米文学』19 : 29-39 山口大学
- 吉村公宏 2004 『はじめての認知言語学』研究社
- Dewell, R. B. 1994 Over again: Image-schema transformation in semantic analysis. *Cognitive Linguistics* 5 (4): 351-380
- Langacker, Ronald W. 1990 *Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar*. Mouton de Gruyter

### 国語辞典

- 日本国語大辞典第二版編修委員会 2003 『日本国語大辞典第二版』小学館
- 松浦明編 2006 『大辞林第三版』三省堂
- 北原保雄編著 2010 『明鏡国語辞典第二版』大修館書店
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編 2011 『岩波国語辞典第七版新版』岩波書店
- 山田忠雄・柴田武他編 2012 『新明解国語辞典第七版』三省堂
- 見坊豪紀他編 2013 『三省堂国語辞典第7版』三省堂
- 山口明穂他編 2013 『旺文社国語辞典第11版』旺文社
- 林四郎監修 2015 『例解新国語辞典第九版』三省堂
- 金田一春彦他編 2017 『学研現代新国語辞典改訂第六版』学習研究社
- 新村出編 2018 『広辞苑第7版』岩波書店

### 資料

- 現代日本語書き言葉均衡コーパス : <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>
- NINJAL-LWP for BCCWJ : <http://nlb.ninjal.ac.jp/>